

## 宇宙航行的最古传说

北 碁 行 記

土星 撮影 熊森照明 2021年8月3日 C-14 LRGB撮影

## 宇宙航行的最古伝説

このところ、ソ連宇宙有人飛行船の地球無事帰還があつて、この話題で世間は熱い。宇宙飛行に話が及ぶと、話が広がり尽きることがない。

人類が宇宙飛行を思いついたのは何時ごろか。面白そうだから、この話をしよう。

嫦娥、飛天、西王母、洪鈞老祖、齊天大聖まで引つ張り出してくると、話題満杯となり、とても話しかれない。また、皆さんが聞き飽きたお話をするのも、馬鹿げているから、宇宙飛行と直接関係のあるのを選んで、最古伝説から話を始めよう。

我国は古い歴史があるので、最古伝説となればやはり古代伝説にそれを求めることになる。宇宙航行のようなホットな話題も、例外ではなく、ちゃんと古代伝説に残っている。

四世紀頃に『捨遺記』という古書が著されて、そこにこのような記載がある。

“堯(ぎょう)、位に登り三十年。巨槎(いかだ)あり西海に浮く。槎上に光有り、夜、明し、晝滅す。常に西海に浮かぶ。十二年にして天を一周する。周すれば復た始む。名づけ、貫月槎(さ)と曰ふ。亦、掛星槎と謂う。”



エジプト 太陽の船

ご覧のとおり、これはまぎれもない最古の宇宙飛行の伝説である。古代にも、こんな船があつて、四海に常時現れたのである。といつてもこれは海に浮かぶ船ではない。十二年に天を一周して、常時航行を続けている船である。大切なことは古代人が、この船で月へ行けると想像していたことである。さまざまな星を巡ることも出来るから“貫月槎”と名付けた。

『捨遺記』の作者は王嘉という人で、彼は東晋時代の方士で、鑿崖穴居して、弟子が数百人いたという。当時、王は仕官の意思がなかった

ので、殺されるに至つたが、彼が書き残した伝説が、最古の宇宙航行伝説となつた。王の著作がこの種の物語の最古のものであるが、驚くべきはその由来を、堯の伝説に求めていることである。

ほかにもう一冊、宇宙飛行伝説を書いた本が残っている。これが、『博物誌』である。西晋王朝の官吏であつた張華という人が書いたと伝えられている。実際は後人の偽作で、『捨遺記』より新しいだろう。この本にも次のような記載がある。

“天河、海と通ず。近世の人、海の渚に居る者有り。年年八月浮槎あり、去來して期を失はず。人、奇志あり。槎上に飛閣を立て、多くの糧を齎(もたら)し、槎に乗り去る。……一處に至れば、城郭状あり。屋舎甚だ嚴なり。宮中を遙望すれば織婦多し。一丈夫、牛を牽き、渚に次(とま)り之に飲ましむに見(あ)ふ。此の人に問う、「此れ是れは何處なり。」答へて曰く、「君還り、蜀郡に至り、嚴君平に問へ、則ち之を知らん。」後、蜀に至り、君平に問ふ、曰く、「某年月日、客星有り、牽牛宿を犯す。」年月を計かれば、正に是、此の人の天河に到りし時なり。”



仙槎

この本は、船で海から天河にゆけると説いているのだ。だがここでは“周天”、“貫月”、“掛星”等の記載がないが、前後の文を合わせると、わりにまとまったことを述べている。

この他、『洞天集』というのに、恐ろしく奇怪な記載がある。“仙槎嚴遵して、唐、之を麟德殿に置けり。長さ五十餘尺。聲は銅鐵の如く、堅く蠹(むしくう)なし。李德裕、細枝を尺餘截(き)り、刻して道像と為す。往往飛去り復た來る。廣明以來、之を失ひ、槎も亦た飛び去れり。”(注：廣明は唐の僖宗の年号であり、時は紀元九世紀の中葉。)

ここで注意したいのが、“仙槎”という乗り物で、ロケットとまったく変わらないことだ。その長さが五十餘尺で、なにか特殊な物質で出来ているらしい。いわゆる“聲は銅鐵の如く、堅いこと蠹(むしくい)なし”といえ、なにか今日のステンレスか特殊合金のような物質を想像させる。不思議な話ですね。如何でしたか。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 【宇宙航行的最古伝説】ひとそえ

一般財団法人「霞山会」発行の月刊『東亜』9月号の特集は奇しくも「宇宙の覇権めざす中国」でありました。

1957年、ソ連が人工衛星「スプートニク1号」を打ち上げ、1961年にはガガーリン飛行士が「ポストーク1号」で有人宇宙飛行。スプートニク・ショックを受けた米国はケネディ大統領がアポロ計画を発表して猛追を開始。

鄧拓が古文書に材を求めた本文を綴つたのは米ソのスペース・レースが激化し、中国が取り残されていた頃に当たります。

中国も1964年の東京五輪開催に合わせたように核実験成功を発表し、1970年に人工衛星「東方紅1号」を打ち上げ、弾道ミサイル・原子爆弾・人工衛星の「兩彈一星」計画を完成させています。その後、「長征」ロケット、「神舟」宇宙船、「嫦娥」「玉兔」月探査機、「北斗」航行測位システム、「風雲」気象観測衛星、「祝融」「天問」火星探査機、「鵲橋」データ中継衛星、「墨子」量子通信衛星、そして「天宮」宇宙ステーション……と続きます。

鄧拓の後継者たちが古代の神話伝説にちなんだ命名をしている間はまだしも、

「遥感」地球表面観測衛星、「烽火」軍事通信衛星となるとキナクさくなります。元来、どの国も宇宙開発はファンタジーの世界ではなく、「科技強軍・航天報國」を使命としているので当然の流れでしょう。

井上邦久



中国 神舟の打ち上げ

## 宇宙航行的最古传说 原文

这几天，人们都在热烈地谈论着苏联载人的宇宙飞船胜利往返的伟大奇迹。人们谈到了关于宇宙航行的各种问题，真是有趣得很啊！

人类究竟从什么时候开始想到宇宙去航行的呢？我想谈谈这个问题就很有意思。

如果把什么嫦娥呀，飞天呀，西王母呀，洪鈞老祖呀，齐天大圣呀，这一切都搬出来，那末，可谈的东西就太多了，简直说不完；而且有很多是人们已经知道的，再说就太乏味了。因此，我不想谈这些，只想比较确切地谈一谈直接有关宇宙航行的最古传说。

我们中国因为是一个历史悠久的国家，最古的传说往往都从这里产生。关于宇宙航行的最古传说果然也不例外。

在公元第四世纪出现的一部古书——《捨遺記》上有一段记载：

“尧登位三十年，有巨槎浮于西海。槎上有光，夜明昼灭。常浮绕四海，十二年一周天，周而复始。名曰贯月槎，亦谓挂星槎。”

看来这是真正最古的关于宇宙航行的传说。似乎在远古时代，真的有这么一条船，经常在四海上出现。但是，它并非只在海面飘浮的船只，而是每十二年绕天一周，不断地环绕航行的。更重要的是古人已经设想到，这条船能够到月球上去，到其他星星上去，所以把它叫做“贯月槎”和“挂星槎”。

《捨遺記》的作者名叫王嘉，他是东晋时代的一个方士，凿崖穴居，有弟子数百人。他当时因为不肯做官，竟被杀害。我们把他记载的这个传说当做最古的关于宇宙航行的传说，不但是因为他的著作出现最早，而且因为他所记载的竟然是尧的传说。

还有一部书也记载了关于宇宙航行的传说，这就是《博物志》。据说它是公元第三世纪在西晋王朝做官的张华的著作；但是，实际上这部书是后人编辑的，可能比《捨遺記》成书的时候还要晚些。这部书上又有如下的记载：

“天河与海通。近世有人居海渚者，年年八月有浮槎，去来不失期。人有奇志，立飞阁于槎上，多赍粮，乘槎而去。……至一处，有城郭状，屋舍甚严。遥望宫中多织妇；见一丈夫牵牛渚次饮之。此人问：此是何处？答曰：君还至蜀郡，问严君平则知之。后至蜀，问君平，曰：某年月日，有客星犯牵牛宿。计年月正是此人到天河时也。”

这是说，从海上坐船可以直通天河。不过这里没有“周天”、“贯月”、“挂星”等等的记载。如果把前后两则文字合起来看，似乎就比较完备了。

此外，在《洞天集》中另有一段十分奇特的记载：“严遵仙槎，唐置之麟德殿，长五十餘尺。声如钢铁，坚而不蠹。李德裕截细枝尺余，刻为道像，往往飞去复来。广明以来失之，槎亦飞去。”(按：广明是唐僖宗的年号，时间是在公元九世纪中。)

值得注意的是这个“仙槎”简直与飞船无异。它有五十餘尺长，并且象是用特殊物质制成的。所谓“声如钢铁，坚而不蠹”，仿佛是不锈钢、特种合金还要高级的物质。你看这不是很奇妙吗？